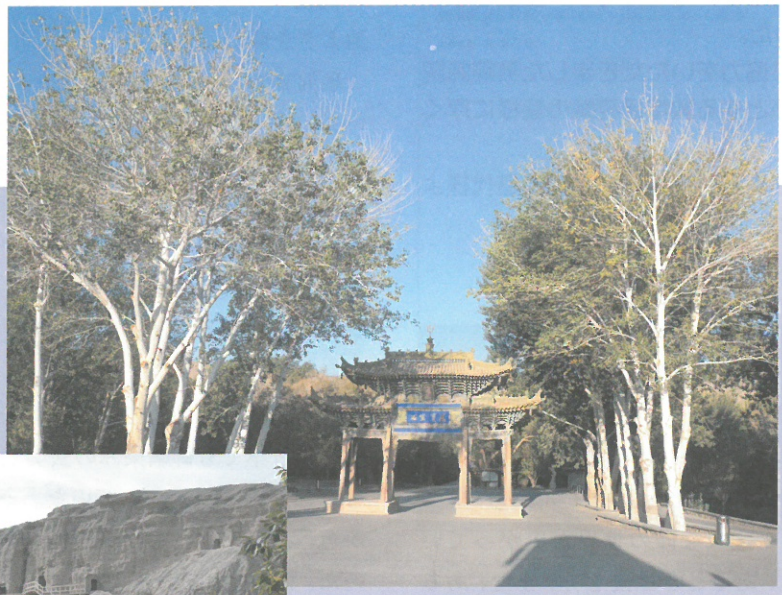
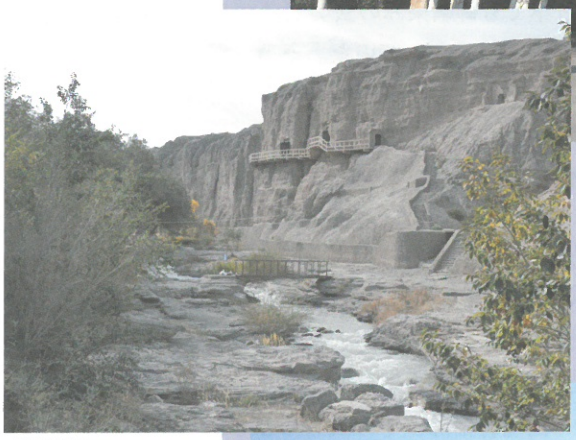
NPO JCP
Japan Conservation Project

NPO JCP NEWS

No. 21・2010. 3.31

・中国敦煌スタディツアー　報告
・和紙の里探訪～紙漉き現場見学ツアー～　報告
・「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」今年も開催
・保存修復の現場から　徳川齊昭建立「向岡記」碑の保存修復と東京大学浅野地区の史跡整備
・書籍紹介　『写真保存の実務』『藤田嗣治の絵画技法に迫る』
・JCP事務局通信





中国敦煌
スタディーツアー

「文化財保存修復専門家
養成実践セミナー」

中国敦煌スタディツアー

2009年度の「世界遺産遺跡スタディツアー」は、10月6日から12日の6泊7日の日程で行われました。

今年は、大変多くのご要望をいただいておりました中国・敦煌を巡るツアーで、参加者もスタディツアー史上最多の35名、講師、スタッフを含めて40名の大旅団となりました。

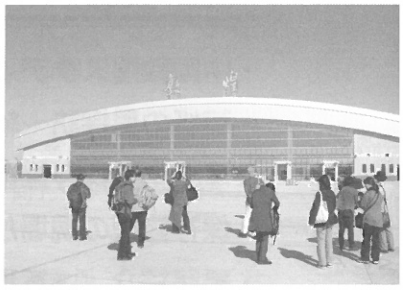
団長は、三輪嘉六理事長（九州国立博物館館長）、副団長が沢田正昭理事（国士舘大学大学院教授）、講師が西浦忠輝副理事長（国士舘大学大学院教授）という構成でした。3名とも長年にわたる仕事の中で、敦煌側と厚い信頼関係を築いている先生方です。そのため、敦煌研究院も総力を挙げて歓迎して下さいました。

敦煌研究院の先生方にご案内いただいての院内施設見学を始め、莫高窟、楡林窟、玉門関などの石窟寺院、遺跡の見学では、敦煌研究院の楊麗英先生、丁淑芳先生に大変丁寧な日本語でご説明をいただきました。また、莫高窟では修復途中の窟も見せていただき、足場に昇り、壁画をより近くで見ることができました。

今回のツアーに大変なご協力をいただきました樊錦詩院長、王旭東副院長をはじめとする敦煌研究院の皆様に厚く御礼申し上げます。

今回は、ご参加いただきました岡茂光様と園部道代様よりご感想をいただきました。

機中から敦煌の山なみを望む



敦煌空港到着

敦煌旅行記

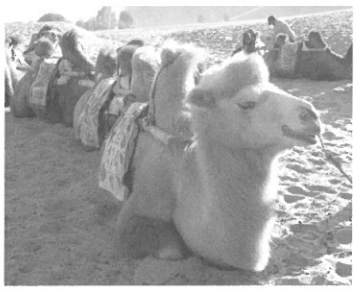
岡　茂光

敦煌は一時期“沙州”と呼ばれていたことがある。“沙州”とは砂の州、即ち砂漠に覆われた土地なのだ。

ここは敦煌市内からほど近くの“鳴沙山”、そこには私が夢に描いた通りの美しく雄大な砂の世界が広がっていた。“風に舞って砂が歌う、あるときは優しく、また、あるときは激しく……”それが“鳴沙山”の名前の由来だ。さあ、シルクロードの隊商になったつもりでビロードの砂漠をラクダで行くとしよう。“鳴沙山”の頂上を目指し隊列はユルユルと進む。月こそ出ていないが思わず口ずさみたくなる。“月の砂漠をー　はるばるとー　旅のラクダは……”時折、風にあおられて砂が舞い砂漠に美しい風紋が描き出され微妙にその姿かたちを変えていく。まさに自然が創り出す芸術だ。遠く眼下には緑のオアシスの敦煌の町が広がり、見上げる空は雲ひとつなく吸い込まれんばかりの青の世界が我々を包み込んでいる。

「いやー！　良い気持ちだー！」昨日までの楽しい旅のハイライトの数々が蘇ってきた。

仏教美術の至宝、莫高窟。規模の大きさに驚嘆すると共に故・井上靖氏が名付けた“美人菩薩”の深遠たる妖しい美しさに目を奪われた。また、唐時代に作られた巨大な釈迦の涅槃像、その神秘の表情に不可思議な心地よさを味わった。



鳴沙山のラクダたち

氷河が削りとった深い谷、谷底を流れる急流の両側に作られたのが楡林窟。その名の通り楡の葉がそよぐ戸外で楽しんだ昼食も得難い体験だった。自家栽培の新鮮な野菜、野趣に富んだ鶏と羊肉の煮込み、そして何と牛肉の入ったラーメンまで！！

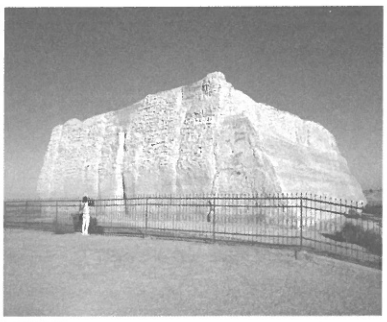
東千仏洞は地の果て、観光客を拒む研究者たちの窟。窟内には日本でも御馴染みの玄奘三蔵が猿面の従者（孫悟空）を連れた壁画が残されていた。三蔵法師はこの土地、瓜州から教典を求めていよいよ西域へと足を踏み出して行ったのだ。

漢時代の西の砦が玉門関である。昔から“春風不渡玉門関”つまり“玉門関には春風は吹かない”と言われたほど自然環境の厳しい所だった。当時、敦煌を扇の要とし西北に玉門関、西南に陽関、この二つの関が西方からの敵の侵入を防ぐ要所だった。今でも砦の外側は見渡す限り美しく色づいた葦原が広がっている。寒風に乗って異民族を迎え撃つ漢の国境警備隊、その人馬のひしめきが聞こえてくるようだ。

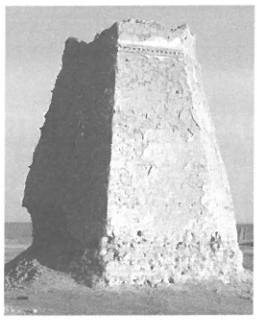
ラクダの隊列が止まって吾にかえった。ここからは徒歩で上を目指すのだ。急な階段を一歩一歩踏みしめて登る。頂上はもう直ぐだ。そして素晴らしい旅のフィナーレもすぐそこまで来ている。

実に有意義で楽しい旅だった。関係者の方々にこの場を借りてあらためてお礼を申し上げたい。

どうも有り難うございました。



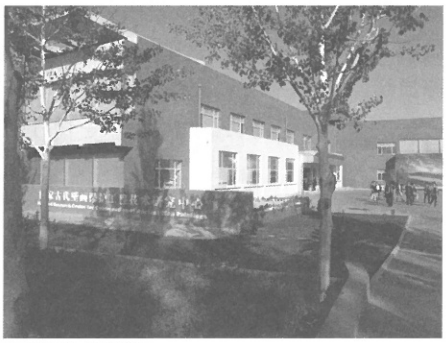
玉門関



漢代の狼煙台

敦煌研究院の招宴
左から　三輪嘉六理事長　樊錦詩院長、沢田正昭理事

NPOJCPの答礼宴
（敦煌賓館にて）
中央が西浦忠輝副理事長



敦煌研究院外観

中国敦煌スタディツアー

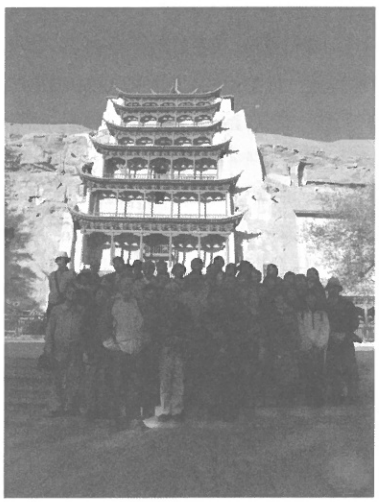
園部　道代

あこがれの地、敦煌。今回で二度目の参加となったスタディツアー（10月6日～12日）は中国敦煌へ。中国大陸の西北、甘粛省にあるこの地はシルクロードの要衝の地、オアシス都市として発展。中でも莫高窟はあまりにも有名である。今回は、前回のスタディツアーでご一緒させていただいた方々、初めての方々、合わせ総勢40名を超えるツアーとなった。やはり敦煌の魅力はこれほど大きいものなのか。さておき、飛行機は一路敦煌へ。

北京で乗り換え、敦煌空港へ到着。空港はこぢんまりとしており、観光シーズンが終わったせいか観光客の姿はほとんどない。静かな雰囲気にほっとし、外に出る。周りは砂漠、やはり何もない。でも、これが個人的に好き。旅行中お世話になる敦煌研究院の方の案内で院内の見学もさせて頂き、歓迎宴も。こんな機会は二度とないだろうと、恐縮しつつ参加させて頂く。

莫高窟、西千仏洞、楡林窟、鳴沙山、月牙泉等々を敦煌研究員の鄭さん、郭さんに案内していただく。専門家の説明はさすがだ。しかし、様々な理由で修復されないまま放置されているものや、環境の影響で悪化していっているのを目の当たりにするのは辛く残念だ。しかし通常の観光では見学できない場所にも、説明付きで入らせていただけるのもこのツアーならではのもの。全く以てありがたい。

先に挙げた名所の素晴らしさをここで書くには及ばないであろうが、私個人、特に印象的だったのは、玉門関、漢の長城、東千仏洞、西晋墓レンガ壁画、破城子などである。何もない沙漠の中、玉門関で孤独に何日（週？月？）も見張りを続ける人は如何ばかりであったであろうか。万里の長城の西の端、漢の長城は人々がこつこつと版築で作り上げた城壁。延々と続いていた城壁の一部が今もその名残を留めている。2000年前の人々に思いを馳せる。ここまで来たことも感慨深い。



敦煌莫高窟前にて写真撮影

沙漠の中の道なき道を、轍の跡を追ってバスは走る。辿り着いた先は東千仏洞。ここを訪れる観光客はほとんどない。ここの主な石窟は西夏時代のものであり、なかなか興味深い。だが、やはり手が回らないようで傷んだまま放置されている。見学後、ここで生活している管理人ご夫婦がスイカを御馳走してくださった、感謝。広い中国には多くの遺跡・史跡が存在する。それらのすべてを管理するのは難しそうだ。破城子も放置されたままなのは同様。残念なことだが。

旅行の楽しみは人様々であろうが、私の楽しみは、目的地はもちろん、道中の景色や現地の人々の様子を見ることも含んでいる。なので、移動距離の長さはさほど気にならない。今回、敦煌賓館を拠点に各所を巡ったが、移動時間の長さは中国の広さを実感させ、私の楽しみを満足させてくれた。

今回、思い出しながら勝手気ままに書かせて頂いた。最後に敦煌研究院と、事務局八木さん、松本さんにお礼を。

和紙の里探訪～紙漉き現場見学ツアー～　報告

第1回目となる「和紙の里探訪～紙漉き現場見学ツアー」は、講師に昭和女子大学の増田勝彦先生をお迎えし平成21年12月12日～14日の日程で開催しました。季節がら参加者は少ないのでは？と心配したのですが、延べ25名ものご参加を頂き、盛況のうちに終了することができました。

今回訪問したのは岐阜の長谷川和紙工房（美濃紙）、富山県の宮本友信様工房（悠久紙）、金沢の斎藤博様工房（加賀奉書）、加藤瞳様工房（加賀ガンピ）、そして最後に福井県　岩野市兵衛様工房（越前奉書）の6軒です。

岐阜では良いお天気だったのですが、トンネルを抜けると時々冷たい雨に見舞われるという変わりやすいお天気。日本の気候の多様さも実感した旅でした。

しかしいずれの工房も、豊な自然の中に抱かれ、清々しい空気が印象的でした。和紙の美しさは、こうした環境に育まれたものなのかもしれません。

今回は参加者の中から、3名の方にレポートを寄せていただきました。

紙漉き現場見学ツアー参加記

福島　希（有限会社　資料保存器材）

2009年12月12日（土）～14日（月）にかけて開催された「和紙の里探訪　紙漉き現場見学ツアー」に参加した。以下に簡単に報告する。講師は、和紙の研究や文化財の修復および保存の権威である昭和女子大学の増田勝彦先生。美濃紙（長谷川聡様）、越中紙（宮本友信様）、加賀奉書（斎藤博様）、加賀雁皮（加藤瞳様）、越前奉書（岩野市兵衛様）の紙漉き工房を訪れ、直接お話を伺うことができた。

各工房では、作業に使用する道具類や、実際の作業を見せていただき、手漉きの紙の現状および今後の展望についてお話しいただいた。ツアーは三日間という短期間で複数の工房を見学するという、なかなか過密なスケジュールだったが、訪れた工房の記憶が鮮明なうちに次の工房を見て回ることができたのは、結果として非常に良かったと思う。工房ごとの違いが容易に分かり、それぞれの工房の特徴が印象に残った。なかでも、和紙の仕上がりを左右する要因に対する考え方が各人によって様々だったのは面白いところで、おそらく紙漉きの方々が互いの意見を聞いたら異論や反論があるのだろうと思いながらも、興味深く拝聴した。コンダクターである増田先生が「自分が行きたい所を選んだ」と仰っていたが、なるほど確かにそれぞれが一流の紙漉き工房であり、それぞれが独自の色を持っていた。

今回、各工房を見て回るうちに、紙漉きという文化が、伝統として続いてきた独特なものであること、多くの手作業を経て漉き上がった和紙は、それ自体が芸術的な美しさを備えていることを強く実感できた。しかしながら、その一方で後継者の問題、ひいては和紙そのものの将来について憂慮せざるを得ないような状況であったのも事実である。後継者問題については、随分と前から言われ続けているが、今回現場を見た限りでは、解決のめどは全く立っていない。和紙というものが、世界に誇れる日本の文化のひとつであるのは確実だが、その文化を支えるだけの基盤は

長谷川和紙工房
長谷川聡様
（美濃紙）

何ひとつ成り立っていないのが現状だ。どの紙漉きの方も、ご自身の仕事に誇りを持っていることは、ひしひしと感じられる。だが、言葉の端々には産業あるいは商品としての和紙への複雑な思いが垣間見え（「500円の原料で500円の紙を漉いている」「この20年間、価格は据置き」など）、やり切れない気持ちにもなった。こうした現状はどこまで世の中に知られているのだろうか。そろそろ具体的な方策を提示して実行しなければ、誇るべき和紙の文化は衰退の一途を辿るのみだと思う。とは言え、私自身も何か妙案が浮かぶ訳でもなく、無力なのがとても歯がゆい。

このツアーでは、紙漉きの方々の人柄や漉いた和紙に魅了されただけでなく、産業としての和紙の将来について考える、またとない機会になった。有意義な時間を過ごさせていただいたことに感謝したい。

紙漉き現場見学ツアー

大入　祥平（株式会社　大入）

今回の『和紙の里訪問～紙漉き現場見学ツアー～』は美濃、加賀、越前と紙の里を訪れ、有名工房の実際の紙漉き現場を見学させていただくというもので、私はこの度初めてツアーに参加をさせていただきました。

最近日本の和紙は、その強靭さ、しなやかさ、そして美しさから国内にとどまらず海外でも注目を浴びていますが、この度のツアーではその所以を学ばせていただいたように思います。

今回のツアーで見学をさせていただいた工房は、いずれも昔ながらの作業で紙を漉いていらっしゃいました。

まず紙漉きは、材料となる楮等を蒸す事から始まり、皮を剥ぎ、大釜で煮続けます。そしてそれを解し、さらに付着している表皮の屑などを除去していきます。そして、攪拌し、漉いて、板に貼り付け乾かし、紙が出来上がるのです。

これら一連の作業ですが、殆どが人の手によるもので、機械や薬品の使用は最小限にとどめられていました。大釜で素材を煮続ける作業、その素材に付着している屑を一つ一つ手で取り除いていく作業、長時間にわたり紙を漉き続ける作業、そして板に漉いた紙を貼り付け、干す作業等、いずれも非常に緻密で忍耐を要する大変な作業です。しかもどれも加減が非常に難しく、職人の方々は長年培った経験を頼りに作業を行っています。

しかしこれら手作業があるからこそ、高品質の、本物の和紙が出来上がるのです。現代の機械や薬品をより導入すれば作業を簡略化できるとのことですが、それでは本物の品質は生まれません。

私はこれら人の手による紙漉きの一連の工程は、楮や三椏、雁皮を、その強靭さ、しなやかさ等といった木の性質を壊さなよう、丁寧にシート状へと変形させる作業のように思いました。過多の現代技術の導入は、作業を合理化する事はできても、木の本来持つ性質を壊してしまう行為となります。

さらに出来上がった紙は木の性質を受け継ぐとともに、光沢、手触り、独特の滑らかさを得て、非常に美しいものでした。

このツアーに参加し、私は改めて和紙の素晴らしさを知ることができたように思います。

また、各現場を訪れると、どの道具、設備も創意工夫が重ねられ、美しく使い込まれています。作業を行っているところも見せていただきましたが、熟練した、まさに流れるような手つきでした。それらは、素晴らしい紙を作り上げようという、その工房の職人の方々の真摯な思いの結晶であり、深く感激をいたしました。

今回の紙漉きツアーに参加し、普段は見る機会の殆ど無い紙漉きの現場を拝見させていただいたのですが、やはり「百聞は一見にしかず」。知識の上では知りえているつもりの紙漉きも、現場を見ることで初めてそのクオリティの高さ、技術の素晴らしさ、そしてその価値を理解できたように思います。このことは私にとって本当にこの上ない、貴重な学びの機会となりました。

宮本友信様工房にて
（悠久紙）

加藤瞳様工房にて
（加賀雁皮）

今回ツアーを企画くださいましたJCP事務局の方々、そして解説くださいました増田勝彦先生、そして若輩者の私にも気さくにお声掛けくださり、お話を聞かせてくださいましたツアー参加者の方々に、厚く御礼を申し上げます。皆様のおかげで、このツアーで多くのことを学べ、そしてとても楽しく過ごさせていただきました。

本当にありがとうございました。

紙漉きツアーに参加して

入江　啓（一世保存修復研究所）

昨年の十二月も半ば、暮れの慌しさの間隙をぬって紙漉きツアーに参加しました。大学では日本画を専攻し、その伝統的な材料で絵を描きつつも、より深く素材を探求する目的から古典絵画の修復の仕事をするようになって二十年余が経ちました。常日頃から使い慣れた和紙のことも、自分の中では少しは分かったような気がしていましたが、改めて紙漉きの現場を訪ね、漉き手を通してもう一度和紙を見直してみたいと思い立ってのことです。思い起こせば学生の頃に五×七の大判雲肌麻紙を漉いていただくのに、越前の岩野平三郎さんの工房を訪ねて以来、紙漉場は二度目の訪問ということになりますが、制作意欲に溢れ、描くという行為のみが証であったあの頃との違いを自分に見出すことも楽しみでした。何よりも分かったようでいて得心のいかぬことは、実際に目で確かめたいと必要に迫られてもいました。名古屋駅から一路バスで岐阜へ。都心のX'masイルミネーションを後にして、これから水と緑深き紙漉きの里を訪れることへの昂揚感。

美濃紙は私たちの工房では最も使用頻度の高いもので、その風合いは絹のように滑らかでありながら、手触りはパリッとした芯の強さがあり何とも清々しい。長谷川さんの

工房を訪ねるのはかねてから念願であり、名人と呼ばれた先代の写真の掛かった旧家屋を背景にして、漉き上がったばかりの白い紙が、細長い橡（とち）の木の一枚板（天然記念物級に貴重）の上で次々と並べ干される様子は、思い描いたとおりに絵になる美しい眺めでした。眼前に広がる板取川と対岸に連なるなだらかな山並みが、ご夫婦の爽やかさと相俟って、長谷川さんの漉いた美濃紙そのものを連想させます。

山間の道をどんどん登って、合掌造りの村が点在する五箇山に到着。道を登るごとに空は一転して重く低くたれこめて、そのしめやかな空気の中に宮本さんの工房はありました。この地で楮を育て収穫し、ちょうどこの時期蒸して樹皮を剥ぎ、黒皮を取り除いて煮沸し、もうすぐ雪が降るからその雪に晒す……、黒々とした木の皮が幾重もの人の手を経て紙が誕生していく工程を伺ったときは、その厳しさから離れ、まるで雪深い里の昔語りを聴いているようで、けれどそのように悠久紙はどこか人恋しいようなとても温かい風合いを秘めています。

五箇山で一泊をして、翌日は石川の加賀奉書紙の斎藤さんと加藤さんを訪ねました。この二つの紙漉き工房は、まるで相対するように、男と女の性を顕著にしていたように思いました。斎藤さんの奉書紙は人肌を思わせるような色合いの中につややかさも兼ね備え、人柄そのものに力強い。表面のつややかな風合いは椿の葉で撫でて整えるのだそうです。それを聴いたとき、椿の葉の持つ光沢が紙に命を与えるような思いがし、大昔に椿の葉のつややかな緑が、古の人々の長命への象徴であったというような神事を思い起こさせました。

加藤さんの工房は街中にあり、加賀という土地柄もあってかあでやかで、女性たちの工房でした。お年を召されていましたが、矍鑠（かくしゃく）としたお姿にしっかりとした語り口で、工房を隅々まで案内していただきました。さまざまな料紙を漉いて創作もされていて、小物なども製造され、和紙を使って何か新しい挑戦をされているようで、頼もしくも感じました。

三日目は越前奉書紙の岩野市兵衛さんを訪ねました。山懐に紙祖神・岡太神社と大瀧神社を祭り、紙漉きの古き里として重厚であり盛んな様子の街並みの中で、市兵衛さんは私達を迎えてくれました。その紙は密で柔らかく、まるで色白のもち肌の女性を思わせるほどです。その美しさは版画紙には欠かせぬもので、どんなに細い線でも写し取るというのも頷けます。ネリはトロロアオイとノリウツギを使っているそうで、その違いを体感できたことは大変に貴重でした。

このようにして工房を訪ね直に漉き手の話を聞くことができて、紙のもつ特徴が素材や方法のみならず、それぞれの風土によってもその風合いを変えていくことを実感しました。そしてどうにも忘れがたいのは、加藤さんのお話です。意を決したようにお話をされた内容は驚きと切なさが入り混じったものでした。長きに渡り育み培ってきた紙を、値段が高いからもう必要ないとある人に言われたそうで

岩野市兵衛様工房近くの大滝神社　千五百年前、紙漉をこの地に伝えたという川上御前（かわかみごぜ）が祭られている

斎藤博様工房近くの風景

す。「この年になってこんな理不尽なことを言われるとは思いもしなかった……」と憤っておられました。加藤さんのみならず、斎藤さんも宮本さんも実際に数字を上げて、経営の厳しさを話してくださいました。市兵衛さんのお話では、かつて全国に七万余りあった紙漉きの工房が、今では二百四十軒ほどに激減しているそうです。ここに来てまでこのような話を聞かされるのかと寂しい気持ちでした。このことは紙ばかりではありません。古き美しき伝承品がなければ、私達の仕事は成り立ちません。しかしその生産工程は非常に時間も費用もかかり、伝え残していくエネルギーも必要ですが、これらの多くの業種がそうであるように、厳しい経営と技術者の高齢化、後継者の不足に喘いでいるのが現状です。私たちの小さな工房にもこれらの荒波が押し寄せていて憂えるばかりですが、実はこうして消え去ろうとしているものの中にこそ、本質的な美が潜んでいることも確かなことだと思うのです。ある美術館で修復の仕事を紹介するために仲間と展覧会を行ったときのことです。一般の方々に和紙に触れてもらい反応を見ました。その透き通るような風合いを見て触って、皆一様に目を輝かせていたことを覚えています。この美しい伝統の技に興味津々なのです。微力ながらこうして情報を知らせることも、私たちのできる大切な仕事なのだと実感しました。修理の世界だけではなく、物を創る立場からも何らかのアプローチが可能だと考えてもいます。すでにそのような活動は多々行われているようですが、こうして少しずつ広がっていくことで、経済によって傾きすぎた振り子がまた元に振り返すように、やがてはまたそれらを手にして、愛でるような日常が必ずや訪れることを願わずにはいられません。ひとたび失ってしまえば、それを取り戻すのは並大抵のことではありません。そうならないように、何かしら自分にも次代に受け渡していけるような微力が求められているのかもしれないと、ひしひしと胸に強く感じられる旅でもありました。

最後にこのような貴重な研修ツアーを企画してくださった、増田勝彦先生とJCPの事務局様に感謝申し上げます。

「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」今年も開催

東京国立博物館との共催で始まったプロジェクト「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」は、平成20年度に大勢のご応募を頂いたことを受け、21年度も開催いたしました。今年度は芸術文化振興基金、（財）文化財保護・芸術研究助成財団の助成を得て、年に2回の開講を実現しました。

セミナーのカリキュラムは、2ヵ年継続受講でひとつのレベルが修了となります。2年目のグループ（Ⅰ期生）が8月3日から14日、1年目のグループ（Ⅱ期生）が8月31日から9月11日という日程でした。

Ⅰ期生30名のうち、今年は22名が熱心に受講し、最終日にはほとんどの人が修了証書を手にしました。

2年目のカリキュラムは、座学ばかりではなく外部見学を多く取り入れました。

森美術館、国立新美術館のご協力で、それぞれの館を見学させていただきました。

一方、町並み保存のNPO「たいとう歴史都市研究会」の協力を得て、谷中地区の建物保存の現場を案内して頂き、その日の夜には同NPOが保存活用を進めている日本家屋「市田邸」において懇親会を行いました。

このセミナーの特徴は、年齢、肩書きに関係なく、真剣に専門家を目指す人なら誰でも参加できるという事です。世代や立場を越えた交流の輪が広がれば、主催者としても大変嬉しいことです。

今回お忙しい中ご協力いただきました講師の皆様、森美術館、国立新美術館の関係者の皆様、NPO法人たいとう歴史都市研究会の皆様、後援頂いた文化遺産国際協力コンソーシアム、一般社団法人　文化財保存修復学会、日本文化財科学会、そして会場の提供をはじめとして多大なご支援を頂きました東京国立博物館に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」を終えて

丹羽　千尋

このセミナーを通して、文化財と向き合うための意識、姿勢について多くを学びました。カリキュラムは、一年で二週間の講義を二年かけて受講し修了するものです。JCPの事業としても初めての一年目、新鮮な気持ちで取り組みました。扱うものや環境、姿勢の違いなど多様な方々を講師に迎え、本当に充実したものでした。前年の熱も冷めず二年目の今回はさらに期待が高まるのは当然です。去年との大きな違いは、東博内の講義室から外へ学びに出たことです。

今年は町並み保存、新しい博物館への見学がカリキュラムに組み込まれていました。これまで携わってきた仕事の対象が、遺物という物質的なものであったこともあり、そこにしか意識のなかった私にとっては、文化財の在り方を考えさせられる内容でした。町並み保存では、建築物を保存するだけで完結させるのではなく、地域全体をとりまく文化を護る活動について垣間見ることができました。そして新設の博物館見学は、文化財施設の今後はただこれまでのスタンスを踏襲するのでは駄目なのだと、新しい動き、将来へ繋げる事を見据えた姿勢が必要なのだと気付かされました。

授業のほとんどは、こちらの求める期待と先生方の熱意が相互に作用していたように思います。しかしながら、内容にもう少し強いひと押しが欲しいと思うものもありました。現状の問題点について、または経済面など、不利なお話を聞けなかったといった、少々もどかしさを感じた場面もありました。そのような課題こそ、文化財に関わるプロを目指して講義を受けている私たちにとっても大事な点ではないでしょうか。

「文化財とは何か」「なぜ護らなければならないのか」「後世に伝える必要があるか」「なぜ修理が必要か」先生方の専門や立場は異なりますが、どの講義の内容も「文化財」を扱う点は共通であり、しばしばこれらがテーマに取り上げられました。その度に、広い視野を持つこと、遺物だけ見ていてはならないのだと思い知らされました。文化財の専門家であるとき、これらを考えずに作業してはならないでしょう。遺物を扱いながら、果たして自分はどこまで考えて行動していたか、反省点がたくさんあります。

修了証書の授与

『自分の研究や技術に関わる基礎知識はもちろん必要であるが、目標にしてはならない。それらはあくまで手段であり、「どう保存が役立っていくか」が大事である。』神庭先生の明確な答えを聞いた時には、頭の中のモヤがスッと取れました。また「この機会、繋がりを大切にしなさい。」と多くの先生から言われました。文化財を護るという事は、決して自己満足に陥ってはならない、多岐に渡る専門性と人との繋がり、知識、経験が必要であることを学びました。

私も含めた多くの方は、この文化財を取り巻く環境の中で自

国立東京博物館館内での見学

講義風景

ワークショップ風景

谷中の建物保存現場の見学（協力：たいとう歴史都市研究会）

分がこれからどう動いたらよいものか模索し、答えを求めてセミナーを受講しました。受講生は皆このセミナーで、自分の専門分野、立場や年齢を超えて共に学んだ仲間として、繋がりが出来たのは間違いありません。私は同じ受講生からもたくさん刺激を受けました。文化財というものを通じて何年先であろうと、どこかでお互いに力になれる場面が必ずや出てくるでしょう。

また、このセミナーは毎年続けて頂きたいし、修了生が何かの形で同セミナーを利用できるシステムがあれば、より活かされたものになるのではないかと、今後もJCPに期待を寄せております。

私のような駆け出しの者にとっては、今後の道しるべとなる非常に心強いプログラムでした。先生方、スタッフの方々と受講生の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

二期生参加報告

白田　詠子

2009年8月31日から9月11日にかけて、JCPと東京国立博物館の共催により行われた「平成21年　文化財保存修復家養成実践セミナー」に参加させて頂きました。第二期生・一年目のクラスとなります。今回、その時の体験レポートを書くようお誘い頂きました。私は短期ながら博物館学芸分野での就業経験があるので、保存修復の技術者の方と少し違うスタンスで授業に参加していたと思いますが、特に印象深かったことを御報告したいと思います。

共催である東京国立博物館で実際にお仕事・研究をしていらっしゃる先生方を中心に、第一線で活躍中の錚々たる講師陣がそろった授業は、一コマ3時間で、濃い内容が続きました。先生方がセミナー参加者に伝えたい情報量は多く、話について行くのがやっとの授業もありましたが、それに不満と言うより、むしろ、今後の課題を頂いたと言う満足感の方がありました。

東博の関係者の先生が多いと言うことは、今、ここで伝えられていることは、取りも直さず日本の博物館の指導的立場である東博が、どのような理念と実際的な活動で資料（美工芸品）を守っているのか、ということを伝えられているのと同じです。情報の信頼性の高さと共に、自分の知る地方自治体の博物館現場と対比ができました。幸か不幸か、「東博は違う、東博だからできる」と言う話ばかりでもありませんでした。「あの東博でも、組織上の問題、予算上の問題、設備上の問題、根は同じような悩みを抱えているんだ」という率直なお話を聞けたのは貴重でした。

もちろん、「やはり東博は違う」と、嘆息する話もありました。それは設備の面などハードだけではありません。例えば、神庭信幸先生を始め、和田浩先生、鈴木晴彦先生の3人の東博勤務の先生方が、それぞれ個別の授業で、ほぼ同じ修復・保存理念を語っていたことです。あれだけ大きい組織で内部のコンセンサスがしっかり取れているということは、博物館だけでなく、あらゆる業種の組織と比較しても、驚異的ではないでしょうか。

三輪嘉六先生の文化財保護法についてのお話は、「何故、文化財‘保護’法であって、文化財‘保存’法ではないのか」という問いかけが印象深い授業でした。三輪先生の授業に先立ち、染織の石井美恵先生が授業で「文化財保護法は読むべき」とご指摘をされ、まともに読んでいないのを恥ずかしく思ったばかりでした。それでも、自分で読んでいるだけでは字面を追うばかりで、大して頭に入りません。三輪先生から、文化財関連の法律の変遷、ひいては条文の言葉が含んでいる意味合いを歴史的に教えていただくことで、初めて見るべきポイントが分かるようになりました。

実はセミナー参加当時、私は転職活動中でした。それ故の身軽さで参加が可能であったのですが、公の身分を持たない私がこのような授業を受けられたのは望外の栄誉で、大変な励みになりました。また、受講仲間もすでに活躍中の技術者から学生まで幅広く、このセミナーで出会えた方々の情熱や研究熱心さに触れられたことも、本当にいい刺激になりました。

最後になりますが、本稿で言及できなかったすべての先生方、セミナーの円滑な運営のために労力を惜しまず払って下さいました関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

徳川齊昭建立「向岡記」碑の保存修復と東京大学浅野地区の史跡整備

原　祐一（東京大学埋蔵文化財調査室）

考古学と保存修復の世界は、まだまだ効果的な連携が取れていない傾向がありますが、東京大学埋蔵文化財調査室に籍を置く原祐一氏は、当機構会員の修復技術者　石原道知氏と連携を組んで、埋蔵文化財の保存と情報の発信に取り組んでいます。今回は石原氏の紹介により、原さんに日頃の活動を寄稿していただきました。

東京大学浅野地区の北西角に、「弥生式土器発掘ゆかりの地」碑が建立されている。この碑は、明治17年に文京区弥生（旧、本郷区向ヶ岡弥生町）で発見された土器が町名から「弥生式土器」と呼ばれるようになり、後に土器の形式名だけでなく「弥生時代」の名称由来となったことを記念し、土器の出土と命名の史実を末永く顕彰するために弥生町会有志が昭和61年7月に建立した碑である。現在の文京区弥生は、東京大学浅野地区、弥生地区に研究棟が林立し、住宅地には近年の再開発によって高層マンションが建設されたが、住宅地の大部分は明治時代の町割りが残る町で、現在も住民の「弥生時代」発祥の地である誇りと町の歴史に関する関心は高い。

町名の「弥生」は徳川齊昭が水戸藩中屋敷（駒込邸）に建立した「向岡記」碑の碑文、「文政十萬梨一登勢止移布年能夜余秘能十日」（文政十一年弥生十日）からとられ、碑の題額となっている「向ヶ岡」は、駒込邸の東側、不忍池を挟んで対峙する「忍ヶ岡」から見た「向こう側」の岡を示す。町名の由来が「向岡記」碑であると明記していない地名辞典もあるが、碑の拓本で東京都公文書館蔵『向岡記』の裏書に「右向岡記係水府烈公撰并書今在向岡彌生町御水戸邸址彌生町名所由起也　東京府記録掛　小宮山（朱印）」と記されている。手拓は小宮山綏介（元水戸藩士　江戸時代は南梁を名乗る）が東京府記録掛（現東京都公文書館）在職中の明治10（1877）年から明治21（1888）年の間に行われ、町の範囲が駒込邸の範囲で町名由来が「向岡記」碑であることが明記されている。「弥生時代」の正真正銘の由来が「向岡記」碑なのである。

2001年、浅野地区工学部武田先端知ビル建設予定地で行った発掘調査では、弥生時代の方形周溝墓、弥生土器、ガラス小玉、管玉が出土した。筆者は恥ずかしながら弥生時代の由来については全く関心がなかったが、遺跡の整理作業の過程で碑の存在を知り、碑を実見することにした。しかし、一度目の探索では発見できず、浅野地区の教職員に碑の位置を問い合わせたが誰も碑の存在を知らず、二度目の探索でようやく碑を実見することができたが、碑は排ガスで黒くすすけ、碑文は酸性雨によって判読できなくなっていた。研究分野に関係なく考古学研究者として、考古学史にとって重要な史跡をこのようなひどい状態まで放置していた当局に怒りを覚えた。そこで、2005年から碑の保存修復と移転を実現するために碑の調査研究を開始した。碑の拓本と軸の制作、碑文の解釈と復元を横山淳一氏、塩原都氏、垂水李氏（日本石造文化学会）に書道家、表具師、石造文化財の立場から参加していただいた。碑の手拓によって碑文はかろうじて残っていたことが判明し、拓本と過去の碑文の解釈を見直し歴史的価値を明確にしていただいた。また、碑が建立されていた駒込邸の造園と景観について、駒込邸関連文書と絵図（筆者蔵）、財団法人水府明徳会徳川博物館蔵の庭園図『向岡記』の分析から碑の建立されていた位置の推定（注1）、江戸時代から現在までの碑の設置環境、どういった経緯で移転したか検討を行った。考古学、文化財関係学会で研究成果を発表し、碑を含めた浅野地区の史跡見学会を周辺住民と教職員に対して行い、碑の保存修復報告書を作成、刊行した（注2）。碑の歴史的価値と保存を大学側に訴えた結果、2008年8月8日、東京大学130周年記念事業「知のプロムナード」学内整備事業に伴い、碑が保存修復され浅野地区情報基盤センター敷地内に設置され自由に見学ができるようになった。碑の保存修復は石原道知氏（武蔵野文化財修復研究所）、堀江武史氏（府中工房）、小林善幸行氏（小林石材株式会社）と協議して行い、碑の設置場所については保存環境と活用を優先し、風雨にさらされない情報基盤センター敷地内に決定した。

方形周溝墓の発掘地点

浅野地区の史跡図

現在、浅野地区内には国指定史跡である弥生二丁目遺跡に史跡解説板、武田先端知ビルの方形周溝墓は移築保存し検出位置に実物大の墓をタイル路面に示し、タンデム加速器で材質分析を行ったガラス小玉の研究成果と、遺跡の研究成果を示した解説板が設置された。出土土器は保存修復を行い展示と貸出ができるようにしてある。浅野北門の道路には調査室が調査した方形周溝墓が保存されている。タンデム加速器と理学部3号館の間の土手は駒込邸の庭園の土手の地形が残っていた。大学側は江戸時代の地形を考慮したとは考えられないが昨年、樹木の伐採が行われ土手の景観が江戸時代の状態に近くなった。文京区教

育委員会は「弥生式土器発掘ゆかりの地」碑近くに浅野地区の史跡を紹介した解説板を設置した。現在の構内の景観から過去の景観を想像することは難しいが、結果的に史跡整備が進み弥生時代から明治時代の史跡のあるキャンパスとして内外に認知されつつある。

参考文献

東京大学埋蔵文化財調査室2009『東京大学埋蔵文化財調査室調査研究報告書9　浅野地区Ⅰ』

注1．原祐一2010「水戸藩駒込邸の研究　藩邸内外の景観と造園の検討」東京大学史料の保存に関する委員会編集、東京大学史史料室発行『東京大学史紀要　第28号』

注2．原祐一執筆・編集・発行2008『「向岡記」碑　保存修復報告書　「向岡記」碑の研究　2008年10月12日　石原道知、小林善幸、塩原都、関岡裕之、垂水李、堀江武史、原祐一、森田信博、丸茂一美、横山淳一』

「向ヶ丘記」碑の保存状況

表1　浅野地区の遺跡・史跡の公開

年月日	種　別	遺跡・史跡	講　演　等	参加者
1999年1月25日	遺跡見学会	工学部風環境シュミレーション風洞実験室地点		20名
2001年8月3日	遺跡見学会、講演会	工学部武田先端知ビル地点	「弥生時代のガラス」（演者：小泉好延氏）	400名
2001年7月19日	遺跡見学会	工学部武田先端知ビル地点		
2001年7月24日	遺跡見学会	工学部武田先端知ビル地点		
2001年.12月15日	遺跡見学会	工学部武田先端知ビル地点	第3回考古科学シンポジウムで遺跡公開	200名
2002年	工学部武田先端知ビル地点1号方形周溝墓公開		駒場Ⅱキャンパスオープンキャンパスで移築資料公開	
2005年3月5日	講演会	文京ふるさと歴史館「平成16年度学習企画展－弥生町遺跡発見120周年記念－文京むかしむかし」	「東京大学構内における弥生遺跡の調査」（演者：原祐一）	50名
2006年4月7日	史跡見学会	浅野地区史跡	浅野地区に設置された遺跡解説板の説明	8名
2007年12月2日	遺跡見学会	浅野地区、弥生地区	集落研究会例会、弥生町遺跡、「向岡記」碑の案内・解説	13名
2008年1月17日	都立向丘高校2年生日本史選択授業	追分新国際宿舎新営地点、浅野地区、弥生地区		30名
2008年2月23日	学習院大学岩淵令治ゼミ見学会	追分新国際宿舎新営地点、浅野地区、弥生地区		15名
2008年2月21日	都立向丘高校2年生日本史選択授業	浅野地区他	都立向ケ丘高校2年生日本史選択授業「東京大学浅野地区と幕末維新」（演者：原祐一）	30名
2008年10月12日	大洗町の歴史と自然を楽しむ会見学会		茨城県立歴史館特別展「幕末日本と徳川齊昭」展示解説	13名
2009年2月19日	都立向丘高校2年生日本史選択授業	浅野地区他		23名
2009年3月4日	鹿児島県鹿児島市立龍中学3年生修学旅行フィールドワーク	浅野地区他		120名
2009年.3月21日	日本石造文化学会史跡見学	浅野地区他		20名
2009年6月27日	彰考館徳川博物館友の会史跡見学	浅野地区他		20名
2009年9月16日	松戸シティーガイド研修会	浅野地区他		40名
2009年9月26日	講演会	浅野地区他	明治大学友の会・明治大学博物館主催「日本考古学2009」「「向岡記」碑と弥生土器の発見」（講者：原祐一）	100名
2009年10月10日～18日	「修復のお仕事展」芸工展	東大出土弥生土器、「向岡記」碑保存修復のポスター展示、浅野地区他見学会実施（2009.10.17）		
2010年3月25日	都立向丘高校2年生日本史選択授業	浅野地区他		22名

表2　遺跡・遺物の保存修復

年月日	遺跡史跡の保存修復・展示	設置場所・収蔵場所
2002年	工学部武田先端知ビル地点1号方形周溝墓の移築	茨城県柿岡倉庫
2006年3月	工学部武田先端知ビル方形周溝墓、弥生二丁目遺跡解説板設置（協力）	工学部武田先端知ビル、弥生二丁目遺跡
2006年3月	文京区、浅野地区史跡解説版設置（協力）	弥生町内
2008年8月8日	「向岡記」碑の保存・展示	東京大学情報基盤センター
2008年	浅野地区出土弥生土器の保存修復	東京大学埋蔵文化財調査室
2009年12月	浅野地区タンデム加速器、理学部3号館土手の整備	

JCP事務局通信

■平成22年度　文化財保存修復専門家養成実践セミナー開催について

平成22年度は、レベルⅠ・後期とレベルⅡ・前期を開講します。

レベルⅠ・後期は、基本的にレベルⅠ・前期を受講した方を対象としますが、若干名新規募集も行う予定です。

平成20年度に受講したにもかかわらず、都合により21年度に受講できなかった方は、優先的に参加を認めます。

レベルⅡ・前期は、レベルⅠの修了証書をお持ちの方を対象とします。レベルⅡは、教室を出て、現場で調査を行いつつ実践を学んでいきます。期間は7日間の予定です。気候的な条件が整う11月に日程を組んでいます。今から予定を入れておいてくださいますようお願い申し上げます。

記）

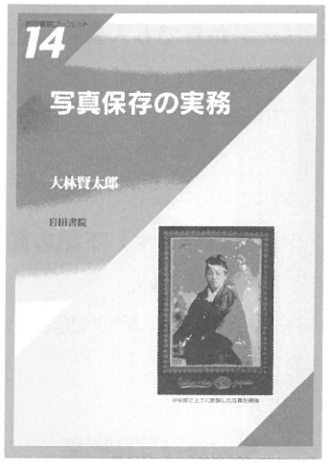
レベルⅠ・後期日程（予定）：平成22年8月30日（月）～9月10日（金）　全10日間（土日休み）

レベルⅡ・前期日程（予定）：平成22年11月15日（月）～21日（日）　全7日間（期間中休み無し）

※上記日程は変更されることがあります。確定次第、会員と受講歴のある方へは郵送にて、またメール、HPなどで広報いたします。

書・籍・紹・介

『写真保存の実務』



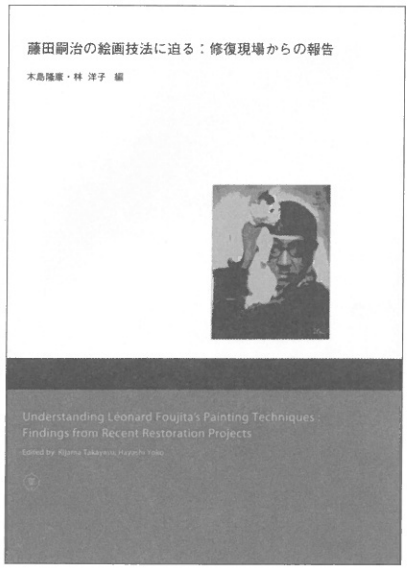
大林　賢太郎　著
岩田書院
2010年1月発行
定価　1,600円＋税
132ページ　A5判

デジタル写真が主流となった今日、写真の保存の重要性は益々高まっている。写真を作品として収集・保存する美術館や博物館が増加したこともその理由の一つであろう。また写真が歴史資料として、あるいは文化的財産として重要視されるようになったことも理由として挙げられる。しかし貴重な写真画像を適切に保存し、後世に残すということは簡単なことではない。大林賢太郎著『写真保存の実務』（岩田書院）は、写真の保存に必要な事柄を分かり易く、豊富な作例写真とイラストを使って解説している。長年、東洋書籍や絵画の保存修復に携わった大林氏が書いた『写真保存の実務』は、写真の保存担当者をはじめとして、写真や文化財等を学ぶ学生など、幅広い読者にお勧めの一冊である。

吉田　成（東京工芸大学芸術学部写真学科　教授）

※『写真保存の実務』
ご希望の方先着20名様まで送料込み1,500円にて販売いたします。お申し込みはJCP事務局　02-3821-3264
E-mail：jimukyoku@jcpnpo.orgまで。

『藤田嗣治の絵画技法に迫る』：修復現場からの報告



木島　隆康・
林　洋子　編
東京藝術大学出版会
2010年2月発行
定価　2,000円＋税
148ページ　B5判

この報告書は、2008年12月6日に東京藝術大学を会場に開催された国際シンポジウム「藤田嗣治の絵画技法に迫る：修復現場からシンポジウムへ」の報告を趣旨として編集されたものです。

木島隆康教授（東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学）と、林洋子准教授（京都造形芸術大学）が監修を務めています。

主な執筆者は、高階秀爾（東京大学名誉教授）、篠田勝英（白百合女子大学文学部教授）、山領まり（山領絵画修復工房主宰）、アン・ル・ディベルデル（エソンヌ県フジタコレクション担当学芸員）、小谷野匡子（絵画保存研究所　代表取締役）、渡辺郁夫（修復研究所21所員、東海大学教養学部芸術学科非常勤講師）、宮田順一（早稲田大学理工学研究所客員研究員、修復研究所21所員）、古田亮（東京藝術大学大学美術館准教授）、歌田眞介（東京藝術大学名誉教授、愛知県立芸術大学客員教授）など。（掲載順・敬称略）

ご入会ありがとうございました。

（平成21年3月1日現在入会者数）

■理　　事　　8名
■登録会員　　171名
■学生会員　　41名
■監　　事　　1名
■専門評価委員　　1名
■評 議 員　　1名
■賛助会員　　31件
■維持会員　　9名
■一般会員　　84名

株式会社　宇佐美松鶴堂
株式会社　宇佐美修徳堂
株式会社　岡墨光堂
株式会社　桂文化財修理工房
財団法人　元興寺文化財研究所
京都造形芸術大学　日本庭園・歴史遺産研究センター
株式会社　京都科学
共同精版印刷株式会社
共和コンクリート工業株式会社
国富株式会社　長崎営業所
株式会社　芸匠
株式会社　光影堂
有限責任中間法人　国宝修理装こう師連盟
株式会社　坂田墨珠堂
株式会社　修美
宗教法人　正法院
中部資材株式会社
株式会社　東都文化財保存研究所
日本通運株式会社　美術品事業部
株式会社　半田九清堂
長谷川　聡
百元　節
株式会社　富士海洋土木
株式会社　フレンドトラベル
有限会社　文化財修復技術研究所
株式会社　文化財保存
溝川商店
山領絵画修復工房
他　個人3名
（アイウエオ順）

NPO JCPの活動に参加してみませんか？

■**登録会員**：年会費　7,000円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

■**一般会員**：年会費　5,000円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。

■**賛助会員**：年会費　一口50,000円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

■**学生会員**：年会費　3,000円
大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。

会員特典　・季刊情報誌の送付
・講演会/研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL. 03-6770-1682　FAX. 03-6770-1683
E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org
URL：www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

・郵便振替　00120−4−10545　NPO JCP
・三菱東京UFJ銀行　四谷三丁目支店
普通預金　3960340
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
理事　三輪嘉六
・みずほ銀行　根津支店
普通預金　1727893
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構

NPO JCP NEWS

第21号
2010年3月31日発行
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
〒110-0008
台東区池之端4-14-8　ビューハイツ池之端102号
TEL：03-3821-3264　FAX：03-3821-3265
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL: www.jcpnpo.org
関西支部
京都造形芸術大学
日本庭園・歴史遺産研究センター内
TEL：075-334-8450

〈理　　事〉
三輪 嘉六（理事長）
大林 賢太郎（副理事長）　西浦 忠輝（副理事長）
伊原 惠司　白井 久明　増澤 文武
荒木 伸介　澤田 正昭
〈本部事務局〉
八木 三香（事務局長）　松本 洋子
〈関西支部事務局〉
伊達 仁美（事務局長）　加藤 亜沙子
〈編集協力〉
嶋根 隆一（伝世舎）